

妾も餘り飲めぬが相手をする、グツと飲んで私にくれる、私が飲んで奥さんと二人で二升程飲んだ」

「何の飲まん事があるものか、よう飲んだやないか」

「その奥さんと云ふのが、色の白い髪の毛の濃い鼻筋の通つた眼の張のえ、そりや何とも云へん美し女や」

「フム、フン〜」

「仰山返事をしな、色の白い處へ酒が入つたさかいほんのり櫻色や、私は色が黒いので櫻色と云ふ譯にいかん、備後徳利粟茶色や」

「怪體な色やな」

「酒と云ふものは氣を狂はすもんや、酔ふた紛れに其處へ寝た」

「フン〜」

「其處へ出て來たのが小柳彦九郎の弟で大五郎と云ふ大きな男や、姉者人、兄者人のお留守見舞に參つた。姉者人は何處いづこに御座ると襖を開けると其處に酒肴が散亂して、赫い顔を仕て私が寝て居る、それを見ると、やあ姉者人には淫ら千萬、兄者人の留守中に不義をなさるとは怪しからん、不義の相手は小間物屋、重て置いて四ツになさんと長い刀をスラリと抜いたので私はビックリ仕て飛び起き

た、一生懸命に廊下へ逃げて出たんや、すると後から追驅けて來た、ヤア小間物屋待て、刀を上段に振り上げて斬附けて來たので、こりや堪らんと思ふて縁側から庭前にはまきへ横飛に飛んで降りた、己れ待てと同じく横飛びをしようと思ふたが縁側が拭入れてある所へ足袋が新あらたや、スルーツと滑つた拍子に利腕を打つて刀をガラリと落しよつた、其の刀が私の前へ轉けて來たので、其の刀を拾ふて大五郎の首をスパリツと斬つてしまふたんや」

「エ、甚い事をやつたな」

「すると奥さんが之を見て、小間物屋甚い事を仕てくれた弟を殺しやつたら此の家には居られん、何處へなりとも連れて逃げてたも、路金をと云ふと手金庫から三百兩持つて來たので胴卷へ入れて、表から出られん裏口からと、女を先へやつて置いて後からスパツト斬つたんや」

「何でそんな無茶な事をするねん」

「こうやつて二人共殺して仕舞ふたら誰も知る者が無い、蟻の穴より堤たぐへの假令、そのまゝ高飛びや、人を二人殺して金を三百兩取つて未だに知れんて、こんな艶事を仕た事はあらしよまい」

「フム、源さんは色男やな清やん、源さんの色男、色男の源さん、エライ奴や、コラ〜源さんの色男、ドッコイ〜コラ〜踊れ……」

「伊八……伊八……」